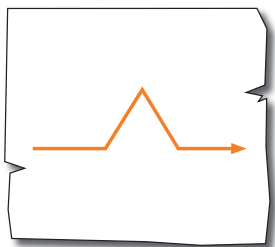


7 THE 7 FRAMES FOR LIFE 7つのワクワク枠 みんなのコンパス①

第7フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

ラブラブになって
幸せを増やしてね♡♪

恋人^る瑠^ね音、おじいさん…と愛し合う
青年期さんぽのフルーツフル果実物語

SAMPO FRUITS



みんなのコンパス①



プロローグ

167

みさき かえ みち
岬からの帰り道――

音楽イン ♪歩み Footsteps

さか くだ ある る ね ぼく
坂を下って歩く瑠音と僕。

「おじいさん、カッコよくて、すてきな人だったね？」 かのじょ あか
い声で言った。

「そうかい？」 み うち けんそん い こと ぼく
身内を謙遜して言うように応える僕。

「そうよ。だって――、――。 わたし のこと、“カワイイ” って言って
くれたよ。アハハッ♪」 かのじょ えがお
はにかむ彼女の笑顔。

――かわいい。

「――ランプベリーの こいぬ ころ
子犬の頃のように、かわいいよ」

かのじょ た ど
彼女は、ふいに立ち止まった。

ぼく た ど
僕も、つられて立ち止まる。

「――わたしも、ランプベリーに会いたかったな」と かのじょ
彼女。

「――」 なに こと ぼ う
何も言葉が浮かばなかった。

「それにしても—— 子^こ犬^{いぬ}の頃^{ころ}のように、かわいいっていうのは、
 なんだか微妙^{びみょう}かも——」 彼女^{かのじょ}は、とぼとぼ^{ある}歩き^{はじ}始めた。

「あ、ゴメン、ゴメン」 僕^{ぼく}も^{ある}歩き^だ出しつつ、「か、わ、い——、
 ——た ——ち？」

「かわい—— たち？ “かわいたち”ってなあに？」 彼女^{かのじょ}が聞き^き
 返^{かえ}した。

「——自分^{じぶん}でも、よくわからない。——イタチ^{いっしゅ}の一種^{いっしゅ}とか？」

「——。——プー！ フフフ、アハハハッ！ おつかしい。

——川^{かわ}に住^すんでいるイタチとか？ フフッ♪」

音楽 ♪ 歩み Footsteps 168 へ続く

168

「——あつ、そうだ！ あれ、“カワウソ”っているじゃん」と僕。

「え？ あの、かわいらしい動物^{どうぶつ}よね？」と溜音^{るね}。

「そうそう。それで、カワウソってさあ—— 主^{おも}に川^{かわ}辺^べで暮^くらす

“イタチ科^かの、ほ乳類^{にゅうるい}”なんだよ」

「え？ ——ウソお？」

「ホント。それで、昔^{むかし}から日本^{にほん}の川^{かわ}辺^べに生息^{せいそく}していた“イタチ科^かの、
 哺乳類^{ほにゅうるい}”は、“ニホン・カワウソ”と呼^よばれているんだ。

ちなみに、海^{うみ}辺^べで暮^くらす“イタチ科^かの、ほ乳類^{ほにゅうるい}”は、ラッコだよ」

「へえー。さすが理系^{りけい}。

——私^{わたし}、ニホン・カワウソ^みって見たことないよ」

「こっちもだよ」

「——アハッ♪ どの動物園^{どうぶつえん}に行けば、見^みられるのかなあ——」

「え？」・・・「きっと、——どの動物園^{どうぶつえん}に行っても見^みられない^{おも}と思う」

「え？ どうして？」

「だって——絶滅^{ぜつめつ}した^いだろうと言われて^いいるから」

音楽急停止 ♪歩み Footsteps

「ええー!?」彼女^{かのじょ}は立^たち止^どまった。

僕^{ぼく}も一^{いっしょ}緒^たに立^どち止^どまった。

「昔^{むかし}から日本^{にほん}で暮^くらしていたカワウソ、ニホン・カワウソは、ずいぶん前^{まえ}から生息^{せいそく}が確^{かく}認^{にん}されて^いないんだって——」僕^{ぼく}の説明^{せつめい}は、絶望^{ぜつぼう}的^{てき}だった。

「——そう。——。——悲^{かな}しいね」明^{あき}らかに曇^{くも}っている彼女^{かのじょ}の表情^{ひょうじょう}——。

「ああ。そうだね」共感^{きょうかん}している僕^{ぼく}の表情^{ひょうじょう}——。

169

ゆっくり歩^{ある}き始^{はじ}めるふたり——。

「ニホン・カワウソは—— どうして絶滅^{ぜつめつ}した^いだろうと言^いわれるま^いでになっ^いてしま^いったの？」瑠音^{るね}が悲^{かな}しげに尋^{たず}ねた。

「——河川^{かせん}の環^{かん}境^{きょう}が悪^{あつ}化^かしてしま^いったせいだったとか、毛皮^{もうひ}に使^{つか}うた^いめに人間^{にんげん}が猟^{りょう}で獲^とり過^すぎてしま^いったせいだったとか… いろいろ

い
言われているようだよ」 ふたりは立ち止まった。

「そう——」 彼女は明らかに沈んでいた。

ああ、なんとか悲しい気持ちを紛らさなくては——。

えっと、あっと、・・・ ——そうだ！

「——かわいいよ」 本心を言った。

「——」 ノーコメントな彼女。

僕に向けられたのは、彼女の軽蔑のまなざしだけのようで——

タイミング悪すぎ！

そのときだ。ふと、手の中の封筒に意識が向いた。

！！！！

「——あつ、そうだ。さっそく、次のフレームを見てみない？」と
僕。

「え？」

「第7フレーム—— 最後のワクワク枠——」

「あ、それもそうね。見てみましょう」

「うん。——じゃあ、行くよ？」

「はい。——来て」

その封筒の中に手を入れると、そろそろ紙を引き出した。

「不思議——」 それが彼女の第一声だった。

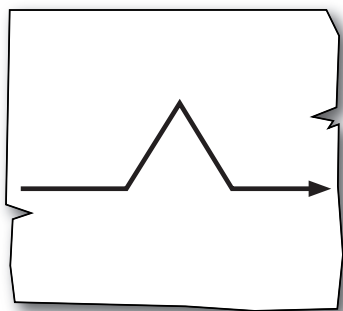
「——え？ 第3フレームの一例？」 それが僕の第一印象だった。

音楽——テーマ曲イン

♪美しき自然 Beautiful Nature

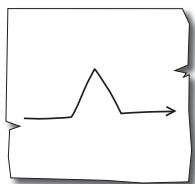
タイトル流れて。

第7フレーム



170

じっか た じぶん きたく ぼく みやげ
 実家を発ち、自分のアパートに帰宅した僕は、お土産のさくらんぼ
 をほおばりながら、それを書き込んだ。



——こんな感じがいい？

でも——

て も はな
 手に持っても話しかけても、うんともすんとも言わず、コンパス
 はり え え あ まわ
 の針の絵が浮かび上がり、それがクルクル回るだけだった。

ひょう し ぬ ぼく つくえ うえ
 拍子抜けした僕は、しかたなく、ペーパー・コンパスを机の上に
 お
 置いた。

それから、音楽を聴こうと思い、CD を手に取った。すると——
 プルプルプル… ペーパー・コンパスが小刻みに震え始めた。

——ん？ 何だ？

フワフワフワ… 次は、やや大きく、振れ始めた。

——んん！？ 何だ何だ！？

そのまま、しばらく経つと——

フワリン！ ペーパー・コンパスが空中に舞い上がった。

！！！！

171

ペーパー・コンパスは、そのまま上昇^{じようしよう}を続け、天井^{てんじよう}にぶつかった。
かと思^{おも}うと、壁^{かべ}にぶつかり、テーブルにぶつかり、本棚^{ほんだな}にぶつかり、
電灯^{でんとう}にぶつかり、床^{ゆか}にぶつかり… それを繰り返^く返^{かえ}すような過程^{かてい}を、
どんどん加速^{かそく}させ始^{はじ}めた。

しまいには部屋中^{へやじゆう}のありとあらゆるものに、猛スピード^{もう}で、ぶつ
かり続^{つづ}けるペーパー・コンパス^{いた}に至^{いた}った。

そこらじゅうに散^ちらばる、CD、さくらんぼ、本^{ほん}、写真^{しゃしん}…。

それは、部屋全体^{へやぜたい}を巻^まき込^こんでいる竜巻^{たつまき}のようで――

「いったい、何^{なん}なんだあ!？」 大声^{おおこえ}で叫^{さけ}ぶ僕^{ぼく}。

「アアッ、アアッアッ! アアッ、アアッアッ! …」

ペーパー・コンパスは何^{なに}か声^{こえ}を発^{はつ}している様子^{ようす}だった。

あまりに素早^{すばや}く動^{うご}き続^{つづ}けるペーパー・コンパス^てを手^とに取^とることな
ど、到底^{とうてい}できそうもなかった。

「オフ! オフ!」 それも全^{まった}く効果^{こうか}がなかった。

もう、どうしようもないとギブアップしかけた、まさに、そのと
きだ。別^{べつ}の声^{こえ}が聞^きこえ始^{はじ}めたのは――。

「よーし、よしよし、よしよし…」

172

「よーし、よしよしよし…」 ペーパー・コンパスは次第^{しだい}にスピー

ゆゑ、ベッド上に舞い降りた。いつしか最初の声も、おさまっている。

「——ごめんなさい！」 コンパリーチェの声だった。

「え？ 何が、どうなって、どうなったんだい？」 僕が尋ねた。

「本当にごめんなさい。部屋、散らかっちゃったね。

——あつ！ さくらんぼも…」

「うん—— だから、いったい、何がどうして、どうなったの？」

「えっと、その、——わたしたちの赤ちゃんなの」

「—— へ？」

「第7フレームの担当は、わたしたちの子なのよ」

「ええ！？」

「幼名コンパルンクル」

「——」

「そうね—— 人間の赤ちゃんで言えば、生後数週間ぐらい？」

「ちよ、ちよっと待った。なぜ、よりによって——」

「間に合ったから」

「——」

「それに、わたしたち、信頼しているの。あなたたちなら、大丈夫だろうって」

「待った、待った！ 生まれたばかりの自分たちの赤ちゃんだぜ！？」

どこにそんな無責任な親が—— これじゃ、育児放棄だよ！」

「—— 5つ子だったの」

「が！？」

「上の子たちがコンパルンクル、コンパリンクル、下の子たちが

コンパレンクル、コンパロンクル」

「——」 . . .

「もちろん、こちらの^{のこ}残りは^{わたし}私たちが^{めんどう}面倒みるわ」

「だから、ちょっと^ま待った、ちょっと^ま待った。そういう^{もんだい}問題じゃ——」

「——よろしくね？」

「だから^ま待ってくれ！ ^{こそだ}子育てなんて、^{まった}全く、やったことないぜ？」

「^{わたし}私たちにとっても、^{はじ}初めての^{けいけん}経験よ。——みんな^{だれ}誰だって、^{さいしょ}最初は、そうでしょ？」

「そりゃ、そうだけど——」

「^{じかん}時間がないの。今、^{いま}話せるのは、^{はな}特例中の^{とくれいちゆう}特例なのよ」

「——」 ^{あたま}頭の中が^{なか}パニックになり、^{なに}何も^{こと}言葉が^ぼ浮かばない——。

「^{にんげん}人間の^{すうばい}数倍の^{はったつ}スピードで^{はつたつ}発達するわ。いずれ、^{こと}言葉も^ぼ話せるようになるはずよ。——あ、ハイ！ あ、もう^{しつれい}失礼しなきゃ！」

「え！？ あ、^ま待った！ ^きいろいろ聞きたいことが」

「ああ、^{じかん}時間^ぎ切れ！ よろし」

「よろし？」

コンパリーチェとの^{おうとう}応答が、まるつきり^と途絶えた。

173

^{ようめい}幼名、コンパルンクル——

この^{いま}今のペーパー・コンパスが、あいつらの^{あか}赤ちゃん——

そんなのって、あり？・・・

モンモンとしながら、“これはここ。これはあそこ…” そんな
ぐあい 場合に、CD、さくらんぼ、ほん しやしん かた つづ 写真… を片づけ続けた。

すると――

ブルブルブル… !!!

さらに――

フワフワフワ… !!!×3

「ああー！！」

いそ 急いでコンパルンクルを^て手に持った^も僕は、^{ぼく}

「よーし、よしよしよし…」 ――あやした。

どうやってあやすのか、よくわからないまま、^じ自己^{こりゅう}流に^{せいいつぱい}精一杯、
^ゆ揺^{うご}動かしただけだったけれど―― フワフワは、それなりにおさ
まってくれた。

――ふうー。あせったぜ。

でも――

ブルブルは、^{すうふん お}数分^{さいかい}置きに再開した。

その^{たび}度に、^{けんめい}懸命にペーパー・コンパスをあやした。

そうこうしていると――

ブルブルブル… トウルルルー♪…

コンパルンクルの^{ふる}震えと電話の^{でんわ}呼び出しが^よ同時に^だ始^{どうじ}まった。^{はじ}

「あ!？」

174

一瞬迷った僕は、まずコンパルンクルを片手で持ってあやし始め、
そうしながら、もう一方の手で電話の応答をすることにした。

「よーし、よしよしよし… ハイ、もしもし。よーし、よしよし…」

「あれ? どうしたの?」受話越しの溜音の声。

「おう。——子育てだよ。赤ちゃんペーパー・コンパスの。幼名コンパルンクル。よーし、よしよし…」と僕。

「ええ! ?」彼女は驚いた。

プルプルプル…

「あー! よーし、よしよしよし! …」

「——なんだか、一生懸命そう」

「あ、あたりまえだろ?」

「——フフッ」

「よーし、よしよしよし! …」

「でも、大変そうね」

フワフワフワ…

「ああ! わかった! よーし、よーし、よしよしよし… よーし、よしよし…」

——あ、ゴメン。いったん切るよ?

あ! よーし、よしよしよし…」

なぜだろう? このときの僕は、これを自分一人で引き受けるべきだと思い込んでいた。

175

それを何回か繰り返した結果、両手で洗濯物を広げて揺らすようにコンパルンクルをフワリフワリと揺らせば、比較的よくあやせられる—— そんな“自分なりの結論”に達した。

そうすることで、プルプルが、“数分置き”から“十数分置き”へと変化したからだ。

でも—— 睡眠も、まともに取れないような、そんなハードな生活が長続きするはずもなく—— 日曜のお昼近く、内心わらにもする気持ちで瑠音に電話した。

「はい、初果陽です」

「あ、夏岬です。今、大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ」

「——」

「どうしたの？」

「どうもこうもあるっていうか—— そっちは、今、どうしてた？」

「あ、レポート書いてた。“生きる力”について思うことを書きなさいだって——。

——アハッ！ “生きる力”って何だろうね？」

・・・ 「——知らねえよ。ただ、今のオレの“生きる力”は、——3%未満？」

「ねえ、だからどうしたの？」

176

瑠音^{るね}のアパートの玄関^{げんかん}にて——

「すまねえ——」 そう言いながら、僕はコンパルンクルを彼女^{かのじょ}に引き渡^{ひきわた}した。

「本当に、頑張り^{がんば}屋さん^やなんだから——。

——じゃあ、次^{つぎ}は私^{わたし}の番^{ばん}ね。なんだか楽し^{たの}そう♪」 瑠音^{るね}は、なぜかイキイキとしていた。

自分^{じぶん}なりに見つけた“あやし方^{かた}のコツ”を彼女^{かのじょ}に伝授^{でんじゆ}した僕は、自分のアパートに戻^{もど}って爆睡^{ばくすい}した。

177

その日^ひの夕方^{ゆうがた}——

ユーウツな気分^{きぶん}に浸^{ひた}りながらも、コンパルンクルを引き取^{ひきと}るために、僕は瑠音^{るね}のアパートにたどり着^ついた。

すると、意外^{いがい}な言葉^{ことば}が待^まっていた。

「ねえ。もうしばらく一緒^{いっしょ}に居てもいい？」と彼女^{かのじょ}。

「え？ もちろん。——え？ でも、平気^{へいき}なの？」と僕^{ぼく}。

「平気^{へいき}も何も—— 楽しいよ♪ それに、新しいコツもつかめていようだし♪ フフッ♪」 彼女^{かのじょ}は、明る^{あか}く、そう言って笑^いった。

「ねえ、どうして、そんなに楽し^{たの}めるの？」

「だって—— 赤ちゃん^{あかこ}を心地^{こころ}よくさせたり、喜ば^{よろこ}せたりするのっ

て、ただそれだけで楽しくない？」

パラララ…

——目からウロコが落ちた。

そうだ。僕は、“コンパルンクルがぐずりはじめたらどうしよう、泣き始めたらどうしよう、暴れたらどうしよう…” そんなネガティブな『Against』の方向のことばかり、考えてしまっていた。

——彼女のポジティブさ、『For』の方向性のおかげで、プルプルは、このときすでに“数時間近く置き”へと変化していた。

178

それから数日の間に、新たな3つのコツを溜音は見つけた。

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

《溜音が見つけた新たな3つのコツ》

1. なでること。 ——特にコチョコチョすると笑うらしい。
2. 歌うこと。 ——特に“ピピピーピピー♪”が好きらしい。
3. 散歩すること。 ——特に自転車に乗ってコンパルンクルを風になびかせると大喜びするらしい。

これらのおかげで、プルプルは、“半日置き”へと変化していた。

「え！？ コンパルンクルの散歩？」と僕。

「そう。これって、とっても気持ちいいみたい。たぶん、快適に空中遊泳している感じがするんでしょうね。

——人に見られると、ちょっぴり恥ずかしいんだけどね。フフッ」

この際、^{さい}恥^はずかしさなんて、どうでもよかった。

それからほとんど毎日^{まいにち}、晴^はれの日^ひはもちろんのこと、雨^{あめ}の日^ひも風^{かぜ}の日^ひも、僕^{ぼく}はコンパルンクルを散歩^{さんぽ}に連れ出^つした。

ランプベリーのときと同じように——。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

179

そうやって——

僕^{ぼく}らは、それなりに“子育^{こそだ}て”をこなしたんだ。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

“プチ・マップ作り”の方^{ほう}はちっとも進^{すす}まなかったけれど——

それからの日々^{ひび}は、僕^{ぼく}らにとって、いろんな意味^{いみ}で幸^{しあわ}せなものとなった。

コンパルンクルは徐々^{じょじょ}に空中遊泳^{くうちゅうゆうえい}の能力^{のうりよく}を発達^{はったつ}させ、部屋^への物^{もの}にぶつからないよう上手^{じょうず}に移動^{いどう}できるようになった。

コンパルンクルのプルプルが、めったに見^みられなくなる一方^{いつぽう}で、逆^{ぎやく}に“キャキャキャ”という笑い声^{わら}が聞^きかれる頻度^{ひんどう}が増^ふえた。

僕^{ぼく}らは、こうした発達^{はったつ}を素直^{すなお}に喜^{よろこ}び、将来^{しょうらい}のさらなる発達^{はったつ}を楽し^{たの}みにし始^{はじ}めた。

こうして“子育^{こそだ}て”に余裕^{よゆう}ができ、大^{だい}学^{がく}生活^{せいかつ}にも慣^なれて自由時間^{じゆうじかん}が増^ふえると、僕^{ぼく}は、いよいよ、好き^すきなテーマについて思^{おも}う存分^{ぞんぶん}学^{まな}び始^{はじ}めたんだ。

い がくぶ たし ひつしゅう か もく おお たいへん とく きょうようぶ
 医学部は確かに必修科目が多くて大変だったけれど、特に教養部
 じ だい じゅけんせい じ だい くら おお じ ゆうじ かん
 時代は、受験生時代に比べれば、ずっと多くの自由時間があつた。

その貴重な自由時間に、試験のためでもなく、何かに制限される
 わけでもなく—— ころ ころ じ ゆう まな
 心ゆくまま、心ゆくまで、のびのびと自由に学
 んだ。

かのじょ い とう じ ぼく みず え さかな じょうたい
 彼女に言わせてみれば、当時の僕は“水を得た魚”状態だったら
 しい。じ ゆう じ かん おお と しょかん しょてん しんせん じょうほう さが もと
 自由時間の多くを、図書館や書店で新鮮な情報を探し求める
 ことに充てた。あ ライフサイエンスのみならず、『発達心理学』や『人
 げんせいしん り がく ふく しん り がく ぼく ひ
 間性心理学』を含む心理学にも、僕は惹かれた。

そして、か あし つき ひ なが
 そうして、駆け足で月日が流れ——
 だいがくさいしょ なつやす あしおと き きせつ
 大学最初の夏休みの足音が聞こえてきそうな季節、コンパルンク
 ルが初めて言葉をはつた。
 はじ こと ば はつ

その言葉とは、“ママ-パパ”でも“お姉ちゃん-お兄ちゃん”で
 も“ひるねちゃん-さんぽくん”でもなく——
 “ピピピーピピー♪”だった。

——言葉？

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 180 に続く

180

なつやす まえ さいご にちようび しゅうご す ぼく
 夏休み前の最後の日曜日の正午過ぎ、僕のアパートにて——

「ピピピーピピー♪ ピピピーピピー♪」 コンパルンクルが、フワ

リフワリと波打つように空中遊泳していた。

その“上下に流れるような動き”は、あたかも“第7フレームが示す流れ”を描いているようでもあった。

「あー、私のせいだ。私がいっぱい歌ったばかりに——。

私の育て方がまずかったんだわ。きっと——」と溜音。

「そんなこと、ないんじゃない？」と僕。

「——まあ、確かに、これからも少しずつ発達してくれそうな気がするわよ。でも、ほかのやり方をしていたら別のあり方をしていたはずだと思うと、なんとなく不安というか、失敗のように思われるというか——」

「——自信ない？」

「ええ、ないわ。——いえ、ある？　いえ、ないわ——」

「フッフ。僕からすると、今までのやり方で十分よかったと思うよ。コンパルンクルが健やかに育っているからこそ、ピピピーピピー♪があるような気がするし——」

「そう思う？」

「うん、そう思う。それに、ほら——何より、コンパルンクルは、こんなに楽しそうにしているよ」

「——ウン。——。しばらく、このまま様子を見ようかな？」

「うん。それがいいよ。きっと」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 181 に続く

181

その後も相変^ごわらずフワリフワリと上下^{じょうげ}に波打^{なみ}つように空中遊泳^{くうちゅうゆうえい}しているコンパルンクル——。

「あ、そうそう、思^{おも}ったんだけどさあ、第7フレームって、あれを連想^{れんそう}しない？ あれを——」と瑠音^{るね}。

「あれって—— もしかして、あれのこと？」と僕^{ぼく}。

「そう、それ。前に話^{まえ}した“社会^{はな}の中で前進^{しやかい}するために乗り越^なえる、社会的なハードル”を連想^{れんそう}するわよね」

「え？ 君^{きみ}のあれって、そのこと？ ——僕^{ぼく}は全然^{ぜんぜん}違^{ちが}ったことを連想^{れんそう}していたよ」

「え？ あなたのあれって何^{なん}だったの？」

「うん。活性^{かつせい}化エネルギーってやつ？ 生物学^{せいぶつがく}や化学^{かがく}の中に登場^なしていたよね？」

「——え？」

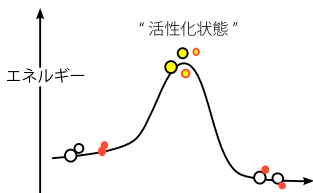
「さまざまな化学反^{かがくはんのう}応^{かつせい}は、活性化^{かつせいかじょうたい}状態、いわば“エネルギーのハードル”を乗り越^のえて初めて達^{はじ}成^{たつせい}されるってやつさ」

「っもう、理系^{りけい}なんだから——」

「しょうがないじゃん」

「フフフ♪」 「アッハッハッ！」

これらの違^{ちが}った連想^{れんそう}内容^{ないよう}が1つにつながるとは、当時^{とうじ}、夢^{ゆめ}にも思^{おも}わなかった。



音楽終了 ♪心地よき日々 Comfortable Days

182

「ピピピーピピー♪ ピピピーピピー♪」 コンパルンクルの^{ようす}様子は、相^{あい}変^かわらずだった。

「——」 無^む言^{ごん}のまま、コンパルンクルの^{ようす}様子をじっと見^み続^{つづ}けている^る溜^ね音^{おん}。

「——大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶ？ 疲^{つか}れない？」と僕^{ぼく}。

「ええ、大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶよ。心^{しん}配^{ぱい}してくれて、ありがとう」

僕^{ぼく}の方^{ほう}は、そのコンパルンクルの^{たんちよう}単^{うご}調^{うご}な動^{うご}きのせいか——
意^いに反^{はん}して、まぶたが、だんだん重^{おも}たくなっていた。

眠^{ねむ}ってはいけない。彼^{かの}女^{じょ}に悪^{わる}いよ。

——でも、眠^{ねむ}い。

少^{すこ}しだったら、眠^{ねむ}ってもいいんじゃないか？

彼^{かの}女^{じょ}は、コンパルンクルに^{しゅうちゅう}集^{しゅう}中^{ちゅう}しているはずさ。

き^きっと気づ^きかないないよ。

それに、ひるねちゃん^{あいしゅう}の愛^{あい}称^{しゅう}だぜ！？ き^きっと許^{ゆる}してくれるさ。

いや、でも—— . . .

っていうか、実^{じっ}際^{さい}、眠^{ねむ}るわけじゃない。目^めを閉^とじるだけだよ。

そう。目^とを閉^とじながら、^{かんが}考^{かんが}え^{つづ}続^{つづ}けるのさ。

うん。 . . .

結^{けつ}局^{きよく}、僕^{ぼく}は、そのま^めま^と目^めを閉^とじ、あ^{かんが}れ^{かんが}こ^{かんが}れ^{かんが}考^{かんが}え^{かんが}を^{かんが}め^{かんが}ぐ^{かんが}ら^{かんが}せ^{かんが}た。

い^{かんが}か^{かんが}にも考^{かんが}えている^とポ^とーズ^とを取^とり^とな^とが^とら^と——。

183

——第7フレームは、やはり社会的なハードルを意味している？

それが、フレーム・フォー・ライフの意味？

うーむ。それとも、別の見方をした方がいい？

もっと、ほかの発想をした方がいい？

たとえば、化学反応を意味している？

でも、化学反応と個人的な人生が関連していそうもないし——

...

うーん。なかなか前に進めないや。

...

ああ、このまま本当に眠りたくなってきた。

でも、眠ってはダメだ。——でも眠い。

いや、ダメだ。

...

そのときだ。

あ！ ひらめいた！？

ひょっとしたら、第7フレームは個人の心の^{なか}の中のハードルを意味しているんじゃないか？

例えば、これも—— あれも、それも… 例は、山ほどある。

——うん。これは、ある個人の^{こじん}の^{いとな}営みが^{ぜんしん}前進する際に心の^{さい}の^{こころ}なかの^{なか}に^{しょう}生じているハードル、個人的なハードル、心のハードルだ！

184

「…大丈夫？ ——大丈夫？」 瑠音の声が聞こえた。

ハッとした僕は、パッと目を開けた。

「ああ、大丈夫、大丈夫」 あわててフォローする僕。

「もしかして、ずっと眠っていたの？」

「ん？ いや、だから、その、目を閉じながら、心の中で、ずっと考え続けていたのさ——」

ふと見ると、コンパルンクルは昼寝をしているようだった。

テーブルの上にとどまりつつ、あたかも腹式呼吸をしているかの
ように、一部がゆっくりと上下運動している——。

「そうそう、それで、ひらめいたんだよ！ 第7フレームの意味！

ついさっき、ひらめいたんだ」、

「ええ！？ ——どんな意味？」

「やっぱりハードルを意味しているんだよ。ただ、この場合、社会的なハードルというより、ひとりの人間の営みが前進する際の個人的なハードル——ある人間が何かを認識してから何かを実現するまでの間に生じている“心のハードル”なんだけどね」

「心のハードル——」

「そう。例えば、コンパルンクルのプルプルを見て、とっさに、あやそうと決める形で乗り越える“心のハードル”とか。

例えば、コンパルンクルの現状を見て、このままの育児でいいのか不安に思いつつも、このまま様子を見ようと決める形で乗り越える“心のハードル”とか。

例えば、眠気を感じ、眠っては悪いと葛藤しつつも、目を閉じて考えようと決める形で乗り越える“心のハードル”とか。

例えば、第7フレームについて、あれこれ迷いつつも、こう解釈して活用しようと決める形で乗り越える、今まさに、ここにある“心のハードル”とか。

つまり——第7フレームの流れは、なにかを認識した人間が“心のハードル”を乗り越えて何かを実現するまでの流れを意味しているんだよ」

「——なるほど。それ、きっと、いいアイデアよ！」

「そうっしょ？」

185

「そうすると、第7フレームを簡単に説明すれば、“認識して、判断して、実現して”という流れよね？」と溜音。

「そうさ。もちろん、もっとシンプルに、“見て、決めて、行動して”でも、“聞いて、決めて、動いて”でも、“ふれて、決めて、動かして”でもいいと思うよ」と僕。

「そうすると、その具体例も、いっぱいあるわよね？」

「そう、いっぱいある。

“プルプルを見て、とっさに決めて、あやす”とかだけでなく——

例えば、コンパルンクルの散歩好きを知り、恥ずかしさ乗り越えてそれを日課にしようと決めて、実際にそうするとか。

例えば、自分の体力の限界を悟り、やむを得ず君に助けを求めようと決めて、実際に電話するとか。

例えば、生きる力が3%未満の哀れな男を助けようと決めてくれ、実際に助けるとか」

「フッフ♪ ねえ、もしかしたら、人生は“認識して、決めて、動かして”の繰り返しである—— なんて言えたりしてね？

——それに、トンガリ山も、何となく“決める”っぽいわ」

「アハハッ。そうだね。 ただ—— “認識しないで”、“決めないで”、“動かさないで”という人生も、ありだろうけど」

「あ、それもそうね♪」

186

ともかくにも、この“第7フレームの解釈”を支持する例が、次々と見つかる一方だったんだ。

例えば、次のような流れ——

CDや本や写真を手に取り、ここに戻そうと決め、実際に戻す。

コンパスとコンパリーチェの両想いを知り、何かいい方法を考え出そうと決め、実際に考える。

“きっと本屋さんに行ってみるといいよ”という瑠音さんのアドバイス聞き、次の日曜に書店に行くことに決め、実際にそうする。

スランプのとき、“休んだほうがいい”という岬のおじいさんのアドバイス聞き、今は勉強を休むことに決め、実際にそうする。

瑠音さんのウワサについて、心笑君に“よく確かめたほうがいいよ”と励まされて、よく確かめようと決め、実際にそうする。

僕の『北の国から'89帰郷』好きを知った心笑君が、『北の国から'87初恋』の録画ビデオを僕に譲ろうと決め、実際にそうしてくれる。『旅人』という自伝で湯川秀樹と再会し、それをヒントにして新たな目標を定めて、実際に、そこに向かって前進する。

初夏を感じ、おじいさんに会いにいとこうと決め、実際にそうする。

宝の地図を見つけ、宝探しに行こうと決め、実際にそうする。

...

もちろん、彼女も見つけた。例えば、次のような流れ――

小学校の担任の先生に会い、それをヒントにして目標を定めて、実際にそこに向かって前進する。

女子更衣室で倒れた僕を見て、急いで保健の先生に知らせようと決めて、実際に知らせる。

アイス・オン・フルーツ・イン・ヨーグルトのアイスが溶け始めていることに気づき、えいやと食べようと決め、実際に食べる。

自転車の荷台に座り続けているのが危なそうだと思い、荷台下りて押そうと決めて、実際にそうする。

感謝の気持ちをしっかり伝えなきゃと思い、帰り道で待とうと決めて、実際に待つ。

自身の合格を知り、お守りを作ろうと決めて、実際に作る。

僕の不合格を知り、励ましに行こうと決め、実際にそうする。

僕の顔が近くにあることを知りながら、目を閉じようとして、実際に目を閉じる。

“夕方^{ゆうがた}から雨^{あめ}”の予報^{よほう}を聞いて、早め^{はや}に洗濯物^{せんたくもの}を取り込もうと決め、
 実際^{じっさい}にそうする。

宣伝^{せんでん}を見^み聞きしたり商品^{しょうひん}を手^てに取ったりして、買^かうか買^かわないか
 を決め、実際^{じっさい}にそうする。

料理^{りょうり}の味^{あじ}見^みをし、調味料^{ちようみりよう}を足^たすかどうかを決め、実際^{じっさい}にそうする。

...

187

「いいお嫁^{よめ}さんにも、なれるよ」と僕^{ぼく}。

「でしょでしょ？ フフ…♪」と瑠音^{るね}。

「アハハ… —うん。つまりは、“見^みたり、聞^きいたり、知^しったり、
 読^よんだり、手^てでふれたり、味^{あじ}わったり、想像^{そうぞう}したり、連想^{れんそう}したり、
 思^{おも}い出^だしたり…” その認識^{にんしき}内容^{ないよう}に応^{おう}じて、新^{あら}たな、ふさわしい行^{こう}
 動^{どう}や思考^{しこう}を決^きめて、実現^{じつげん}する—— そのような流^{なが}れだね」と僕^{ぼく}。

「ええ、そうね。 —あつ、“臨機応変^{りんきおうへん}”も当^あてはまるわよね？」

と彼女^{かのじょ}。

「ああ、そうだね。それに“タイミングよく”も当^あてはまるよ」

「タイミング——」

「そう。疲^{つか}れているからと休^{やす}むタイミング」

「夏^{なつ}休^{やす}みだからと運^{うん}転^{てん}免^{めん}許^{きょ}を取^とるタイミング」

「初^{しょ}夏^かだからと、岬^{みさき}のおじいちゃんに会^あいに行^いくタイミング」

「ふたりきりだからとキスするタイミング？」 瑠音^{るね}は、さくらんぼ
 のように照^てれながらい^いった。

「アハッ！ ——まあ、そうさなあ。タイミングよく、キスしたり、
あ
会ったり、と
取ったり、やす
休んだり…」 …… 「——あっ！」

「どうしたの？」

「そうだ、わかった！」

「え？ なに
何が？」

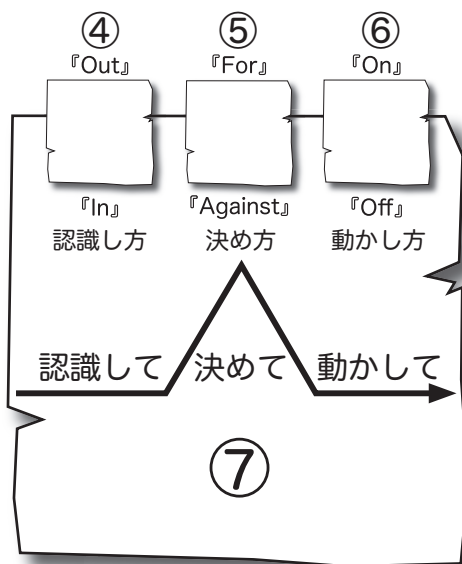
「ほら、き
気づかない？」

——だい
第4フレームからだい
第6フレームまでとのかんけい
関係さ！

『In Out』は、どうにんしき
認識するか、にんしき
認識し方を示すフレーム。

『Against For』は、どうき
決めるか、き
決め方を示すフレーム。

『Off On』は、どううご
動かすか、うご
動かし方を示すフレーム」



「あっ、ホントだ！ わかった！」

188

相変わらず昼寝をしているコンパルンクル——。

「確かに、認識し方に応じて、決め方は変わりうるね」と溜音。

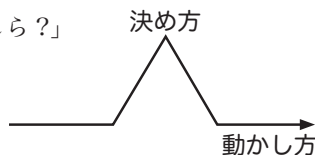


「そうさ。例えば、何かを短い目で見てイヤでも、長い目で見ればよい」ときもある」と僕。

「そうね。それに、“特定の誰かだけを見てよくても、その誰かをふくむ、みんなを見れば悪い」ときもあるわ」

「そうだね。——つまり、ズーム・インして見るかズーム・アウトして見るかを根幹とする認識し方に応じて、その評価、価値判断、意志、意欲…などの決め方は変わりうるのさ」

「ええ、そうね。——ねえ、じゃあ、決め方に応じて、動かしか方も変わりうるかしら？」



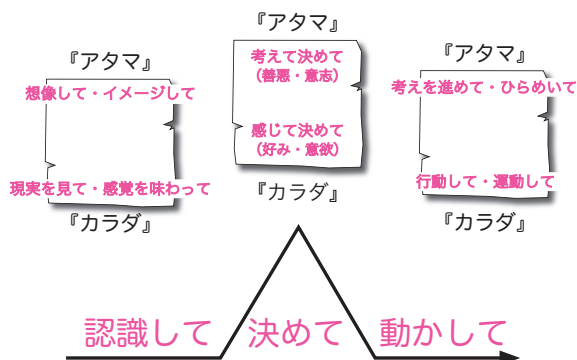
「そりゃそうさ。“好き - キライ、よい - 悪い、しよう - するまい、イヤイヤ - 喜んで…”などの決め方に応じて、実際にどんなふうにか動かすか——例えば、“くつつくか - 離れるか、手に入れるか - 手放すか、大きな成果がでるか - 小さな成果にとどまるか…”などの動かしか方が変わりうるのは明白だよ」

「アハッ♪ それもそうね」

189

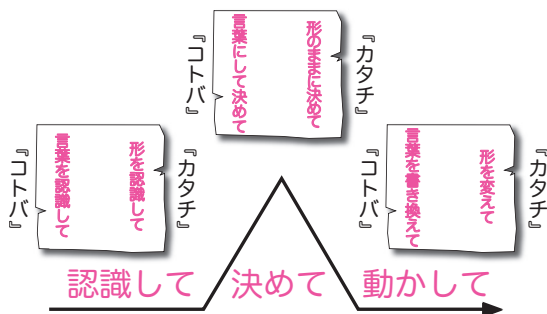
「さらには、第1フレームとも関連させられるよ。

例えば『カラダ アタマ』なら、次のようになるよ」と僕。



「アハッ♪ そうね。

そうすると—— 例えば『カタチ コトバ』なら、次のようになるのね？」と瑠音。



「そうだね」

190

「——あつ！」 僕は声を上げた。

コンパルンクルは一瞬フワリと浮かび上がり、再びテーブルに舞い降りた。

「どうしたの？」と溜音。

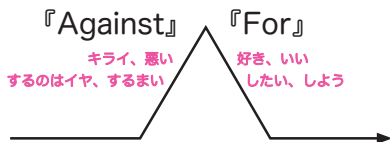
「うん。坂をよいしょこらしょと上るのと坂をスイスイ下るのは、どっちがラク？」

「坂を下る方」

「うん。じゃあ、坂を上るのと下るのは、どっちが好き？」

「え？」 なぜか彼女は少し驚いた様子だった。「——それもやっぱり、坂を下る方？」

「だろだろ？ ♪ 僕も。 ——それでひらめいてしまったよ。第7フレームの“トンガリ山”は、坂を苦労して上る方が『Against』、坂をスムーズに下る方が『For』って具合に、それぞれ対応しているだろうって。



例えば、坂を上る部分が“キライ、するまい…”に、坂を下る部分が“好き、しよう…”に対応していると考えられるのさ」

「アハッ ♪ 確かにイメージとびつたり合っているような気がするね。 ——でも、そんなふうに安易に意味づけていいのかしら？」

「——アレ？ やっぱり？」

191

「あ！でも、この解釈^{かいしゃく}には、大きなメリット^{おほ}がありそうだよ」と僕。

「どんなメリット^{るね}？」と溜音。

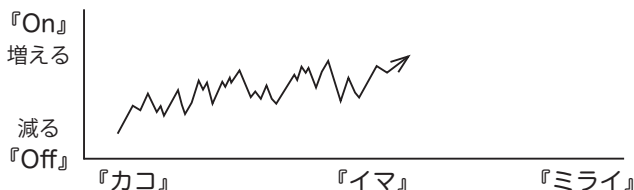
「第7フレーム^{だい}が単なる^{たん}第3フレーム^{だい}の一種^{いっしゆ}ではないことが、はっきりするというメリットさ。

この解釈^{かいしゃく}のおかげで、第7フレームの意味^{いみ}が、単なる^{たん}“流れや変化^{なが}”^{へん}ではないと確定^{かくてい}するのさ」

「——え？ どういうこと？」

「うん。例えば——」

第2フレーム『カコ イマ ミライ』と第3フレーム『→』と第6フレーム『On Off』を単純^{たんじゆん}に組み合わせてできるのは——何^{なに}かの“数や量^{かず りよう}”などの増減^{ぞうげん}の様子^{ようす}を示す、次のような図になると思うんだ。

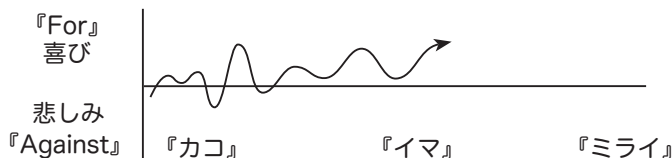


例えば、降水量^{こうすいりよう}や気温^{きおん}、株価^{かぶか}、体重^{たいじゆう}、人口^{じんこう}…の変動^{へんどう}とか？」

「——あ、そっかあ」

「うん。ここで第6フレーム『Off On』を第5フレーム『Against For』と交換^{こうかん}すれば、今度は、例えば“喜び^{よろこ} - 悲しみ^{かな}人生^{じんせい}曲線^{きよくせん}”になるのさ。

——こんな感じ^{かん}？」



「アハッ♪ そうよね」

「これらの“数や量”などの増減を示す図や“喜び - 悲しみ人生曲線”の図を支える第3フレームと第7フレームが根本的に違っていると確定するためにも、“坂を苦労して上る方が『Against』、坂をラクラク下る方が『For』”と解釈できることが重要になるんだよ」

「——ええ、そうね」

「つまり、やっぱり“新しいフレーム”なのさ。第7フレームは」

「——それは、子どもが“新しい存在”であるのと似ているね？」

フッ♪」

「——アハッ。確かに似ているね」

ふたりで、昼寝中のコンパルンクルを見つめた。

192

夏休みに入ってから、コンパルンクルの発達は続いた。

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

コンパルンクルの発達のスピードは、予想を超えていた。

空中遊泳チャリンポ、写真撮影、買い物、家事…を含む、さまざまな体験を共にすることや、本、音楽、映画…を含む、さまざまな文化と接したことは、コンパルンクルの視野をグングン広げたと同時に、その発達を大いに促した。

特に言語能力の発達には目を見張るものがあった。

例えば、「オン！」と僕らが言うとき——フワリン！

コンパルンクルは舞い上がり、フワリフワリと空中に浮かんだ。

「オフ！」と言うとき——フワフワフワ…

コンパルンクルはテーブルに舞い降り、静止した。

僕らは、コンパルンクルが将来どこかのオーナーにお仕えするときのために考え、“スイッチ・オン、スイッチ・オフのマナー”をコンパルンクルに教えたのだった。

——確かに、半分は自分たちのためであったけれど。

コンパルンクルは、とても素直に従った。

しばらくの間だけは——。

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

193

夏休みが明けて間もない頃、コンパルンクルは言うことを聞かなくなかった。

「オフ！ オフ！」

「ギャギャギャ！ いやだぜーい♪ アニキー！」

——おいらは、まだまだ、くうちゅうゆうえいをつづけていたい
のさ〜♪ はっは〜♪」

フワリフワリ——

「これができないと、あとあと^{こま}困るよ。

それに、これができれば、^{しょうらい}将来、^{こま}困らないだけでなく、^{ぼく}僕に
^{さん}散歩に^ぼ連れて^つ行^いってもらえるよ」

「いいピョーン♪

おねえちゃんに、つれていってもらうピョーン♪

——アニキ、だいつキライ♪ おねえちゃん、だいすきい〜♪」

「——ったく」

「おねえちゃんに、あいたい。あいたーい！」

あいにくいぜーい！」

^{はんこう}反抗^き期——

ではなく、^{みづか}自らの^い意志の^し芽^め生^ぼえと^よ呼びたいと思^{おも}った。

^じ自分の^{ぶん}欲^{よつき}求^うを感じ^{かん}とりながら^{みづか}自らの^い意志を^し自分^じで^{ぶん}育^{はぐ}むことができ
るということ—— ^いコン^みパ^{すこ}ル^{せい}ン^{ちよう}クルは、ある意味、健やかに成長し
ていると思^{おも}った。

194

「おねえちゃんに、あわせてくれーい！ ♪ いますぐ、おねえちゃんに、あわせろーい！ ♪」

ぞく 続、コンパルンクルの主張——。

「だから、もう少し待ってられないかい？ 来週、きっとお姉ちゃんに会えるから」

「らいしゅうじゃイヤだ！ きょう、あいたい！ いますぐ、あいたい！ ——いまから、あいはいこうぜーい！」

「お姉ちゃんに会いたい気持ち、よくわかるよ」・・・「——うーん。でも、困ったなあ」

「どうして、こまるんだ？」

「お姉ちゃん、大事な試験を控えているから。」

だから、今は勉強に集中しなきゃならなくて—— もし今からお姉ちゃんに会いに行けば、お邪魔虫になるんだよ」

「シケンで、なんだ？」

「うん。試験というのは、“知識や知恵や考える力をよく身につけたね”って評価すること。お姉ちゃん、この試験をちゃんとパスする必要があるのさ」

「もし、チャントパスしなかったら？」

「お姉ちゃん、夢の実現から遠ざかって、ものすごく悲しむ。」

もしそうなったら、どう思う？」

「——イヤだ。そうなってほしくない」

「うん。僕も同じだよ。」

——じゃあ、どうしようか？」

「うん、まってる。きょう、いくのやめる」

「えらーい！

——うーん、これは“思いやりの心”の獲得にともなう“過剰な自己中心性の克服”ってやつだね。パパは、うれしいよ。

って、パパじゃないけど」

「ただ—— おねえちゃんに、なにかしてあげたいな。

なにをしたら、よろこぶかなあ？」

「うーん、そうだなあ——」・・・「——お姉ちゃんに、手紙を書くのは負担になっちゃうだろうし、——今は何もしない方が一番喜ぶかも。——うん。今は何もしないのが一番の応援になるよ。きつと」

「わかった。何もしないーい♪ 何もしないーい♪」

195

“自らの意志”を周りと調和させながら育てるということ——
コンパルンクルは、やはり健やかに成長していると思った。

育児は、“単に子どもの欲求を何から何まで満たしてあげればよい”ってわけではないのだろう。

“何が本当に子供のためになるのか”の判断は、実は、とても難しいのだろう。

196

その次の週、コンパルンクルは、試験を無事終えた瑠音との再会を果たした。彼女のアパートにて――。

《コンパルンクルの疑問その1》

「ふたりは、けっこうしているのか？」

「――え？」 「――」 とまどう瑠音と僕。

《コンパルンクルの疑問その2》

「おなかのあかちゃんは、どのようにして、うまれるの？」

「――」 「ゴホッ」 赤くなる瑠音とせき込む僕。

《コンパルンクルの疑問その3》

「――ふたりは、〇〇〇したのか？」

「――」 「――」 ふたりとも、さくらんぼのように赤くなった。

はしゃぎながら、フワフワ舞うコンパルンクル――

「こらこら、そういうことを、むやみに口にするものじゃないよ。
お姉ちゃん、明らかに“困っています”って顔しているだろ？」

「――」 黙り込むコンパルンクル。

「ブー！ フフフッ、アハハハッ！ ――。男の子の気持ち、私には、よくわからないけど―― やっぱり、そういう興味で湧く時代があるのって、自然なことなんでしょ？」 と言いながら彼女は僕のほうを見た。

「――え？」 僕は、思わず疑問の声を上げた。

「男^{おとこ}の子^こだったら、そのくらい探^{たん}究^{きゅう}心^{しん}があつて元^{げん}氣^きな方^{ほう}がいいのかもね？」と彼女^{かのじょ}。

「——ああ、まあね」——そういう問^{もん}題^{だい}！？

「もし、おんなのこだったら—— わるいのか？」 《もつともな疑^ぎ問^{もん}その1》

——おう、そうだそうだ。

「うーん、それは——、——。ふつうは、そうなんじゃないかな？
——アレ？」 やや苦^{くる}しげな女^{かのじょ}。

「どうして？」 《もつともな疑^ぎ問^{もん}その2》

「どうしてって、——え？ どうして？」 逆^{ぎゃく}に女^{かのじょ}がコンパ^{コン}ル^パンク^ルルに問^とい^{かえ}返^{かえ}した。イヤな予^よ感^{かん}がした。

「だって—— オレ、おんなのこだぜ？」

「——」 女^{かのじょ}の顔^{かお}が、明^{あき}らかにひきつった。

「アッハッハッ！ コンパ^{コン}ル^パンク^ルルはさあ、きっと、“男^{おとこ}”と“女^{おんな}”
の言^{こと}葉^ばの意^い味^みを取^とり違^{ちが}えているよ」 僕^{ぼく}なりに余^よ裕^{ゆう}をかまし、サポ^サー
トしてあげた。

でも——

「そんなわけないだろ。だって、アレがついてるほうがおとこのこ
で、ついてねえほうがおんなのこだろ？ オレ、ついてねえもん。

ガッハッハッ！」

ズドドドーン！！

197

その^{あら}新たな^{にんしき}認識^{あき}によって、^{ふか}秋^{なか}が深まる中で、コンパルンクルとの
むきあ^あかい^{かた}方を^{ぼく}僕らは^{いっぺん}一変させた。

音楽イン ♪秋 Autumn

“何^{なに}が^{ほんとう}本当にコンパルンクルのためになるのか”を、さらに^{しんけん}真剣に
^{かんが}考えながら、コンパルンクルと^{せつ}接し^{はじ}始めた。

「オホン。“キャキャキャ!”と^{わら}笑えばいい^{ぼく}っちゃ」と僕。

「どうして? ——オレ、そんなのやーだよ! ギャッハッハッ!」

とコンパルンクル。

「ああ、いかん、いかん。“オレ”と言うのも、やめるんよ」

「どうして?」

「どうしてって、そりゃあ、^{おんな}女^この子だから」

「おんなのこだと、——なぜ、“ギャッハッハッ!”や“オレ”をや
めなければならないの?」

「——。えっと、つまりは——」・・・ ——なぜだ! ?

「おとことか、おんなとかいうまえに、オレはコンパス・フォー・
ライフだぜ? ——アニキたちも、おとことか、おんなとかいうま
えに、にんげんだろ?」

「そりゃ、まあ—— まあ、だから——」 ごもっともです。

^{にがわら}苦笑^るい^ねしている^る溜音——。

コンパルンクルは、^よ予想^{そう}をはるかに^こ超えて、たくましく^{はったつ}発達して
おり——^{けつきよく}結局、コンパルンクルをできるだけ^る溜音^ねの元^{もと}で^す過ごさせ
ることに^{ぼく}僕らは決めた。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

198

そのことが功^{こう}を奏^{そう}したのか杞憂^{きゆう}だったのか、12月のクリスマス
が近^{ちか}づくあたりから、コンパルンクルは妙^{みょう}に女^{おんな}の子^こっぽく振^ふる舞^まい
始^{はじ}めた。

音楽イン ♪サンタクロース

それはそれで、とても不思議^{ふしぎ}な感じ^{かんじ}であり――。

「あの子^こと何^{なに}を話^{はな}したの？」 瑠音^{るね}に、そっと尋^{たず}ねてみた。

「――女^{おんな}の子^こどうしの秘密^{ひみつ}？」と彼女^{かのじょ}。

「――」 . . .

「フッフ♪ 私^{わたし}との話^{はなし}よりずっとずっと大きいのは、やっぱり好^すき
な男^{おとこ}の子^こができたことじゃないかしら？」

「ええ!？」

それからのコンパルンクル語録^{ごろく}――

「キャキャキャ♪ わたし、すきなコンパスできちゃったあ♡!

「シアワセ♡♪ シアワセ♡♪ キャハハ♡♪」

「いつかけっこんしたーい♪ けっこんしたーい♪ キャハン♡♪」

「ミライのなまえ、コンパリーナにき〜めた♪ ワクワクするう♪」

「わたしも、おねえちゃんのように、やさしくなりたーい♪ やさ
しくなりたーい♪」

「もっと、せっきよくてきになれば、おねえちゃん、きっと、よろ
こぶよお。キャハハン♡♪」

いつしか、恋^{こい}のアドバイザーにまで到達^{とうたつ}しており――。

音楽フェード・アウト ♪サンタクロース

199

ゆき^ど解^きけの季節^{せつ}——

音楽イン ♪春 Spring

コンパルンクルとの別^{わか}れの季節^{きせつ}を迎^{むか}えた。

その日^ひ、晴^はれわたる空^{そら}のもと、コンパルンクルと溜^る音^ねと僕^{ぼく}は、大^{だい}学^{がく}から最^{もっと}も近^{ちか}い海^{うみ}の砂^{すな}浜^{はま}に來^きていた。

「父^{ちち}と母^{はは}があいさつしたいって——」 さびしげなコンパルンクル。

「娘^{むすめ}が大^{たい}変^{へん}お世^せ話^わになり、あ^ありが^がとうご^ござ^ざい^いまし^した^たで^です^すう^う〜！ ♪」

父^{ちち}コンパ^こス^えの聲^{こゑ}が響^{ひび}く^くと同^{どう}時^じに、フワフワ浮^うい^いて^てい^いる^るペー^ぱパー^ーコン^こパ^パス^すが、な^なん^んと、2^{まい}枚^ふに増^まえ^えた。

「娘^{むすめ}が大^{たい}変^{へん}お世^せ話^わになり、本^{ほん}当^{とう}に、あ^ありが^がとうご^ござ^ざい^いまし^した^た。

お^おか^かげ^げ様^{さま}で、こ^こん^んな^なにス^すク^くス^すク^く同^{どう}じ^じに——。あ^あな^なた、や^やっ^っぱ^ぱり、よ^よか^かつ^つた^たわ^わね♪ お^おふ^ふた^たり^りに^にお^お願^{ねが}い^いし^して」 母^{はは}コン^こパ^パリ^りー^えチェ^えの聲^{こゑ}が響^{ひび}く^くと同^{どう}時^じに、フワフワ・ペー^ぱパー^ーコン^こパ^パス^すが、な^なん^んと、合^{ごう}計^{けい}3^{まい}枚^{まい}に増^ふえ^えた。

「ええ、そ^そう^うで^でご^ござ^ざい^いま^ます^すね^ねえ^え〜♪ コ^こン^こパ^パリ^りー^えチェ^え♪」

「——。そ^それ^れか^から、兄^{あに}と姉^{あね}、弟^{おとうと}と妹^{いもうと}もあ^あい^いさ^さつ^つし^した^たい^いっ^って^て♪」 少^{すこ}し^し明^{あか}る^るく^くな^なつ^つた^たコ^こン^こパ^パル^るン^んクル。

「兄^{あに}の^のコ^こン^こパ^パラ^らン^んクル^るで^でご^ごわ^わす。妹^{いもうと}が大^{たい}変^{へん}お世^せ話^わになり、あ^あり^りが^がと^とう^うご^ござ^ざい^いまし^した^たで^でご^ごわ^わす」 威^い厳^{げん}あ^あり。合^{ごう}計^{けい}4^{まい}枚^{まい}に増^ふえ^えた。

「姉^{あね}の^のコ^こン^こパ^パリ^りン^んクル^るで^です。妹^{いもうと}が大^{たい}変^{へん}お世^せ話^わになり、あ^あり^りが^がと^とう^うご^ござ^ざい^いまし^した^た♪」 清^{せい}楚^そさ^さあ^あり。合^{ごう}計^{けい}5^{まい}枚^{まい}に増^ふえ^えた。

「弟^{おとうと}の^のコ^こン^こパ^パロ^ろン^んクル^るだ^だじ^じえ^えー^い。お^お姉^{ねえ}ち^ちや^やん^んが、大^{たい}変^{へん}お世^せ話^わにな^なり、ど^どう^うもあ^あり^りが^がと^とう^うだ^だじ^じえ^えー^い」 わ^わん^んぱ^ぱく^くさ^さあ^あり。合^{ごう}計^{けい}6^{まい}枚^{まい}に

ふ
増えた。

「妹のコンパレンクルですよ。お姉ちゃんが^{ねえ}大変^{たいへん}お世話^{せわ}になり、どうもありがとうですよ♪」^{あいきょう}愛嬌^{ごうけい}あり。合計^{まい}7枚^ふに増えた。

^{こせい}個性あふれるみんなのあいさつに^{あつとう}圧倒^{へんとう}されて、返答^{こま}に困っている
と、父^{ちち}コンパースが口^{くち}を開^{ひら}いた。

「——あ、それでは、そろそろ、お時間^{じ かん}でございますう♪」

「——」^{だま}黙^こり込^{むすめ}んでいる娘^{むすめ}コンパレンクル。

「——あいさつ、するでしょうか？」^{ちち}父^{むすめ}が娘^{うな}に促^{うなが}した。

「——。今^{いま}まで—— いろいろ—— アリガ—— トウモロコシ！
キャキャキャ！♪」

「こらこらですう～！♪」

「キャハハ♪ どうもありがとーう！ 今^{いま}まで、本^{ほん}当^{とう}に、いろいろ
お世話^{せ わ}になりましたあ♪ お姉^{ねえ}ちゃん、大^{だい}好^すき♪」^{かのじょ}彼女^{ほお}の頬^{ほお}にペツ
タリくつついた。

「——」^えほほ笑^{かのじょ}む彼女^{かのじょ}。

コンパレンクルは彼女^{かのじょ}の頬^{ほお}から離^{はな}れると、今^{こん}度^どは——

「お兄^{にい}ちゃん、大^{だい}好^すき♪」^{ぼく}僕^{おでこ}の額^{おでこ}にペツタリ——。

「あ！？」^{い ひょう}意表^{い ひょう}をつかれて、あせった。

そうして——

^{ぼく}僕^{おでこ}の額^{おでこ}から離^{はな}れたコンパレンクルは言^いったんだ。

「おふたりさん、いつか結^{けっ}婚^{こん}してね～♪

ラブラブになっ^{しあわ}て幸^ふせを増^ふやしてね♡♪

そうして、ずっと、ずっと、ドキドキ・ウキウキ・ワクワク・ホ
ワホワ・ハッピー・ピピピーピピーでいてね♡♪

キャハハッピー・ピピピーピピー♡♪」

それから――

「それでは、さよならですう♪」「さよならね♪」「バイバーイ♪」

「さようならでござす」「さようなら〜♪」「さよならだじえーい」

「さようならですよ♪」 7枚のそれぞれから7つの声^{こえ ひび}が響いたか

と思うと、コンパース一家^{おも}のみんなは、沖へ^{おき}と向かってフワリフワ
リと空中^{くうちゅう}遊泳^{ゆうえい}を始めた^{はじ}。

すると、そのまま海^{うみ}の上空^{じょうくう}を遠ざかり^{とお}続け、水平線^{つづ}の、はるか
彼方^{かなた}へと進み^{すす}、見えなくなってしまうた。

「行^いっちゃったね」 ポツリと口^{くち}にする溜音^{るね}――。

「ああ」

「なんだか、――急^{きゅう}にさびしくなっちゃったね」

「ああ」

――このさびしさが、子ども^こが巣立^{すだ}ったときの親^{おや}の気持^{きも}ちなのだ
ろうか？

ふと、去年^{きょねん}の春^{はる}、引越^ひしのトラック^こに乗^のる僕^{ぼく}を見送^{みおく}る両親^{りょうしん}の姿^{すがた}
が心^{こころ}に浮^うかんた。

「これが、親^{おや}の気持^{きも}ちなのかな――」 そう口^{くち}にした溜音^{るね}の脳裏^{のうり}に
も、故郷^{こきょう}の両親^{りょうしん}の姿^{すがた}が浮^うかんでいたらしかった。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

200

そのまましばらくの間、瑠音と僕は一緒に砂浜に座り続けた。

ザブーン、ザザザシュー …

どれくらいの時間が経ったのだろう。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

瑠音が、ふいに口を開いた。

「“生きる力”ってさあ、自分自身が生きるために、第7フレームの3つのステップを繰り返す力じゃないかしら？ レポートを書いている当時は、全く気づかなかったけれど——」と彼女。

「え？ どういうこと？」と僕。

「うん。例えば、少なくとも—— 寒いから厚着するとか、お腹が空いたから何かを食べるとか、疲れたから休むとか、眠いから眠るとか…」

「そうだね。結局どれも、自分自身が生きるために、“気づいて、決めて、動かして”のように3つのステップを繰り返している——」

「でしょ？ この3つのステップの繰り返しは、子育ても同じよ」

「あつ、そうか。子育ても、結局は、“観察して、判断して、行動して”のような3つのステップの繰り返し——」

「そうよ。子育ての場合は、特に“相手を生かす”ための第7フレームの3つのステップの繰り返しであって、まず最初に子の様子や実状をちゃんと認識しなければ、子育ては始まらない。その実状の認識があるからこそ、“その子が生きるために何をすればよいのか”の判断が的確にできて、子育てが成立するのよ。

その辺りのことは、“愛する”の反対が、単に“憎む”とか“愛さ

れる”とかだけじゃなくて、“^み見ないこと、^{む し}無視、^{む かんしん}無関心…”でもあ
ることを、ちゃんと説明^{せつめい}してくれているんだわ。きつと——」

「ああ、なるほど」

「それに、^{だい}第7フレームの3つのステップを繰り返^くしていれば、^こ子
側^{がわ}の発達^{はつたつ}に応じて、こちら側^{がわ}が^か変わったり、軌道修正^{きどうしゆせい}したり… より
よい育児のために、育てる側^{そだ}も自然^{しぜん}と発達^{はつたつ}しているでしょうし——」

「ああ、そうだね」・・・「——あつ、そうだ！ それらは、きつ
と、^こ子育て^{そだ}だけじゃなくて、^{ものづく}物作りでも^{しょう}生じているプロセスだよ」

「どういうこと？」

「^{たと}例えば、^{しゃしん}写真。

あれは、ふつう、カメラのファインダーから見える画像^{み がぞう}に応じて、
“^{こうず}構図や^{なんど}ピント”などを何度もよりよく微調整^{びちようせい}して—— それで、
やっ^りと理想^{り そう}の作品^{さくひん}へと育^{そだ}つ。

その過程^{かてい}で、“^み見て、^き決めて、^{ちようせい}調整して”って具合^{ぐ あい}に3つのステッ
プを繰り返^くすことによって、作品^{さくひん}が育^{そだ}っているだけでなく、自身^{じ しん}の
技術^{ぎじゆつ}が^{じようたつ}上達したり^{けいけん}経験値がアップしたりを^{ふく}含めて、よりよい作^{さく}画^が
のために、作品^{さくひん}を^{はぐく}育てている側^{がわ}も自然^{しぜん}と育^{そだ}っている——。

——それは、詩^しも同じ^{おな}じでない？」

「そうよ！ 詩^しも、何^{なん}度も読み返^よして、その都度^{つ ど}よりよく書き直^{か なお}し
て—— それで、やっ^{いま}と今^{さくひん}の作品^{そだ}まで育^{そだ}っているわ。

その過程^{かてい}で、確^{たし}かに、“^よ読んで、^{かん}感じて、^か書き直^{か なお}して”って具合^{ぐ あい}に、
3つのステップを繰り返^くすことによって、作品^{さくひん}が育^{そだ}っているだけで
なく、自身^{じ しん}の感性^{かんせい}が^{みが}磨かれたり^{けいけん}経験が^つ積まれたりを^{ふく}含めて、よりよ
い作^{さくし}詩^しの^{さくひん}ために、作品^{はぐく}を^{がわ}育てている側^{しぜん}も自然^{そだ}と育^{そだ}っているね」

「そうだね。つまり、第7フレームの3つのステップを繰り返して何かの作品を育てている間、同時に、自分がよりよいパフォーマンスをするために自分自身も育てている。

このように作品育ての間に、作品だけでなく自分自身も育てていることは、育児の間に、子どもだけでなく自分自身も育てていることと同じなのさ。

どちらも、結局、誰かや何かを生かそうとしていると同時に、自分自身をより生かそうとしている」

「おもしろい。——そうすると、“生きる力”って、結局、自分自身を生かす力なのかもね。自分以外の誰かや何かを生かす力と『In Out』的に逆の意味の——。

そういう意味では、自動詞の“生きる力”よりも、他動詞の“生かす力”の方が、より普遍的で役立ちやすいのかもね？」

「——なるほど。きっと、そうである気がするよ。

それに、一般に、自動詞は他動詞に置き換えられるはずだよ。

生きる力が、自分自身を生かす力へと置き換えられるように——
例えば、育つ力が自分自身を育てる力へと、発達する力が自分自身を発達させる力へと、動く力が自分自身を動かす力へと、歩く力が自分自身を歩かせる力へと、楽しむ力が自分自身を楽しませる力へと、喜ぶ力が自分自身を喜ばせる力へと…置き換えられるから」

「おもしろい♪ きっと、そうよ」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 201 に続く

201

「第7フレームが示す3つのステップを繰り返す営みには、本当にいろいろな例がありそうね？」と溜音。

「そうだね。その営みには、例えば——

生きる営み = 自分自身を生かす営み、

責任を持って対応しながら誰かを生かす営み、

心ゆくまで洗練させながら創作品などの何かを生かす営みもある」と僕。

「そうね。その営みには、さらに——

愛する営み、

育む営み、

発達させる営みもあるね」と彼女。

「ああ、そうさ。それに——

臨機応変させる営み、

初志貫徹させる営みもある」

「ええ。それに——

タイミングを取る営み、

バランスを取る営みもあるわ」

「それに——

ある言葉を改善し自分にピッタリになるまでバージョンアップさせる営み、

ある言葉のよさを実感しバージョンダウンさせない営みもある」

「それに――

よりよいライフを育む^{はぐく}営み^{いとな}、

よくなったライフを維持^{いじ}する^{いとな}営みもあるわ」

…

音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

202

大学^{だいがく}2年^{ねん}目の^め初夏^{しよ か}――

音楽イン ♪歩み Footsteps

僕^{ぼく}らは、また一緒^{いっしょ}に、おじいさん^あに会い^{みさき}に岬^むへと向かった。

それまでの発見^{はっけん}で溜音^{る ね}は十分満足^{じゅうぶんまんぞく}していたようで、「これらが

究極^{きゅうきょく}の意味^{い み}かもしれないね？」^いと言^いっていた。

もちろん、それまでの発見^{はっけん}も、とてもよい発見^{はっけん}だと思った。^{おも}

でも、内心^{ないしん}――

これらの意味^{い み}に、あのおじいちゃんがたどり着けなかったとは
考^{かんが}えにくいのではないか？

そんな気^きがして、僕^{ぼく}は物^{もの}足りなさ^たを感じ^{かん}ていた。

「ねえ、この急^{きゅう}な坂^{さか}って―― ハア、ハア… 何^{なん}度^ど来^きても、やっぱり、

きつくてイヤだね。イヤんなっちゃう～」坂^{さか}を上^{のぼ}りながらの彼女^{かのじよ}。

「“イヤイヤ”言^いうなって――。よけいイヤ^{おも}に思^{おも}えてくるだろ？」

と僕^{ぼく}。

「だって、イヤなんだもん。ハア、ハア…」

「ちょっと休^{やす}もうか？」

「ううん、大丈夫^{だいじょうぶ}。ありがとう。ハア、ハア…

おも思^{おも}ったんだけどさあ。こんなに坂^{さか}がきつくてイヤなのに、それでも坂^{さか}を上^{のぼ}るっていうのは—— おじいさんに会^あいたい気^き持ちが、急^{きゅう}な坂^{さか}を上^{のぼ}るのがイヤという気^き持ちより、まさっているからよね？

ハア、ハア…」

「そうだね。——うん。人生^{じんせい}、“100% 好^すき”とか“100% いい”とかだけで成^なり立^たっているとは限^{かぎ}らないんだね」

「ホント、微妙^{びみょう}なときもあるよね。ハア、ハア…

じっさい じんせい
実際の人生^{じっさい じんせい}では——。ハア、ハア…」

「——確^{たし}かに、好^すきキライ、よい悪^{わる}い… それぞれ微妙^{びみょう}な比^ひ率^{りつ}関^{かん}係^{けい}で成^{せい}立^{りつ}しているときもある。だから、ときに迷^{まよ}ったり躊^{ちゅう}躇^{ちよ}したりもするし—— ときに動^{うご}きがとれなかつたりもする」

「そうね。ハア、ハア…」

「それでも、ときには、思^{おも}いきって何^{なに}かのアクシヨンを取^とること、その結^{けつ}果^かに応^{おう}じた新^{あら}たな別^{べつ}のアクシヨンを取^とること… が必^{ひつ}要^{よう}になつたりして——」

「——ええ、そうね。ハア、ハア…」

さか のぼ
坂^{さか}を上^{のぼ}りきると——

くだ こうばい さき
なだらかな下^{くだ}り勾^{こう}配^{ばい}の先^{さき}に、キラリが見^みえた。

にんしき ぼく つか いっしゆん ふ と
その認^{にん}識^{しき}は、それまでの僕^{ぼく}らの疲^{つか}れを、一瞬^{いっしゆん}で吹^ふき飛^とばしてくれ
た。さわやかな海^{うみ}風^{かぜ}とともに——

音楽 ♪歩^あみ Footsteps 終^{はつ}

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For Life

みんなのコンパス①

第7フレーム

『  』

【完】